

松 山 大 学 論 集  
第 33 卷 第 1 号 抜 刷  
2 0 2 1 年 4 月 発 行

科学における価値と客観性に対する  
フェミニスト科学哲学のアプローチ  
—— フェミニスト経験主義と  
フェミニストスタンドポイントの展開 ——

二 瓶 真 理 子

## 研究ノート

# 科学における価値と客観性に対する フェミニスト科学哲学のアプローチ

—— フェミニスト経験主義と

フェミニストスタンドポイントの展開 ——

二 瓶 真理子

### 1. イントロダクション

「フェミニスト科学哲学」とは、1980年代頃から使用されるようになった語で、経験的知識の探究である科学についての哲学的・認識論的分析と、男女の平等を目指す社会的・政治的観点または運動として捉えられるフェミニズムとが結びついた領域を指す。現在では様々なアプローチにより、科学の価値自由性が疑問視され、科学的探究の様々な側面に対して、様々な種類の価値が不可避に影響と役割を持つことが論じられている。科学が、社会的・政治的諸価値の影響を受けつつも客観的であることをいかに説明するかという問題は、フェミニストに限らず、こんにちの科学哲学上の大きなテーマのひとつとなっている。しかし、少なくともフェミニスト科学哲学の出現時においては、価値自由であることが科学の客観性を担保するという見解が主流であり、そのような科学像と、政治・社会的価値のひとつといえるフェミニズムとの関係は決して自明なものではなかった。科学とフェミニズムとが、あるいは科学と諸価値とがいかに適切に結びつきうるのかは、それじたいフェミニスト科学哲学者の課題であり、彼女らが科学における諸価値と客観性にかんする議論状況をリードし

てきたともいえる。

本稿は、フェミニスト科学哲学者たちが、いかにして、また、いかなる価値負荷的かつ客観的科学像を提起してきたのかをたどる。その内部の2つの代表的路線であるフェミニスト経験主義とフェミニストスタンドポイントについて、それらの起源と主張、両者の相違、近年の展開を整理することを目的とする<sup>1)</sup>。

## 2. フェミニスト科学哲学の萌芽期： 1980年代の哲学的転回

フェミニスト科学哲学 (feminist philosophy of science) は、1980年代、後述する科学と女性問題の「哲学的転回」とともに括りだされてきた立場である。分析哲学系フェミニズムの専門誌として知られる *Hypatia* もこの時期に独立創刊している。本節では、転回前後の科学と女性をめぐる議論状況と、初期のフェミニスト科学哲学が直面していた問題をおさえておく。

### 2-1. リベラルフェミニズムと差異のフェミニズム

科学史家のシービンガーは、『フェミニズムは科学を変えてきたか』(1999年)のなかで1980年代までに提起された科学における2つの路線、「リベラルフェミニズム」と「差異のフェミニズム (difference feminism)」が直面していた問題点を指摘している (Shiebinger [1999])。

科学業界のジェンダー比偏向、より直接的には女性科学者の不足は19世紀末にはすでに問題視されていた。これに対して男女の機会平等を保障する立法を求め、女性に男性と同等の科学参入と技能習得機会を確保しようとしてきたのが、リベラルフェミニズムである。シービンガーは、リベラルフェミニズムが女性の権利拡大や職業選択の自由に大きく貢献したことは認める。しかし、リベラルフェミニズムが先導してきたパイプラインモデル (科学の入り口に女性も含めれば、出口として女性科学者も増加するという発想のもとでの量的平

等政策を指すシービンガーの語)は、1960-70年代になっても女性科学者数の顕著な増加をもたらさなかった。この失敗は、リベラルフェミニズムが、既存の科学制度に女性が男性と同様に参与することを男女平等とみなし、女性にたいして科学への同化を求めたことによるとシービンガーは述べる。リベラルフェミニズムは、既存の科学の方法や制度を疑問視しない点、科学制度に潜在的に含まれているジェンダーバイアスや各種の価値観を不可視化してしまう点で問題がある。

これに対して1980年代初めころから発言力を増してきた差異のフェミニズムは、男女の差異を強調し、男性にはない女性の独自の視点や価値観、たとえば共感的、主観的、協調的とかいった“女性らしい”観点が、科学研究を行ううえで有益であると主張する。シービンガーは、この路線が科学の内部で価値観が積極的な役割を持ちうることを指摘した点は評価するが、差異が通俗的に理解されることで女性と科学両者にとって有害な結果をもたらしまうと指摘する(Shiebinger [1999] 10)。男女の差異が、男女の普遍的性質、普遍的女性性・男性性を主張するものと理解された場合には、この路線は男女のステレオタイプの強化に手を貸すことになる。また、女性独自の観点からの科学研究、あるいは女性は男性とは別の仕方科学をするという側面の強調は、主流の科学とは別の“フェミニスト科学”が存在するかのような誤解を生み、科学内部に無用な分裂をもたらしかねない。

## 2-2. ハーディングによる「哲学的転回」

リベラルフェミニズムと差異のフェミニズムとは、拮抗しつつそれぞれ問題を抱えていたわけだが、これと同時期にハーディングが、女性と科学問題の哲学的転回を唱える。彼女は、科学におけるフェミニズムが置かれた状況をふまえつつ、これまで重視されてきた「科学における女性の問題」(科学領域のジェンダー偏在の量的法的是正という論点)から「フェミニズムにおける科学の問題」(科学制度や科学の方法に含まれるジェンダー偏見の批判的指摘と科学内

部でのジェンダー的価値観の役割の考察)に目を向ける必要性を強調した(Harding [1986])。彼女の提案は、フェミニズムという政治的社会的コミットメントや価値観が、科学の方法や内容に対して持ちうる影響や役割を哲学的に検討すべきであることを哲学者たちに促し、フェミニズム認識論・フェミニズム科学哲学の出発点となった。

「フェミニスト経験主義 (feminist empiricism: 以下 FE と略記)」と「フェミニストスタンドポイント (feminist standpoint: 以下 FSP と略記)」という語ないし立場は、フェミニズム認識論および科学哲学のいくつかの萌芽的アプローチを検討するさいにハーディングが使用したものが起源となっている。ハーディング自身は明確に述べていないが、フェミニスト経験主義はシーピンガーの言うところのリベラルフェミニズム、フェミニストスタンドポイントは差異のフェミニズムの主張を汲んだアプローチともみなせる。とはいえ、後述するように現在の FE および FSP は、ハーディングの 1986 年時点での説明とはかなり大きく異なっている。

1986 年時点のハーディングの記述では、FE は科学の客観性をあらゆる価値観から自由であることに求める。また従来の科学の方法(伝統的な経験主義)は厳密に遵守されればあらゆる価値観を排除できる仕組みをもつと想定している(Harding [1986] 24-25)。したがって、本来であれば混入していないはずの性差別的偏見や価値観を、経験的方法への違反、つまり、悪しき混入として排除することで、より“客観的な”科学が実現できる。初期 FE は、女性の観点は、性差別や男性主義的偏見への感知を高め、偏見の除去に役立つといういみで、男性の観点よりも客観的科学の実現に貢献しやすいとしており、この点にフェミニズムへのコミットメントが現れている。ハーディングは、しかし、この立場は非整合であるとする。もしも、伝統的な経験主義の方法が、本当に、本来的に諸価値を排除する機能をもつなら、そもそも男性優位主義とか性差別的価値観や偏見がそこに混入することもないだろうし、女性的な価値観が貢献する余地もないのではないか。しかし、科学が偏見によってゆがめられた科学

史的事例は存在するし、その歪みに気づいたのはフェミニストたちであった。ハーディングは、この非整合性は、「逆説的に」経験主義の伝統的方法の不備を示唆すると指摘している (Harding [1986] 26)。

同じく 1986 年時点のハーディングの記述では、FSP はマルクス主義のルーツのもとで「社会生活における男性の支配的地位は偏った不当な理解を帰結するが、女性の被支配的地位はより完全でより正当な理解をもたらす可能性がある」と主張する。FSP は、「女性の観点 (perspective) を、自然・社会生活についてのわれわれの解釈や説明のための道徳的かつ科学的に望ましい基盤としての「スタンドポイント (standpoint)」へ変容」させようとする (Harding [1986] 26)。ハーディング自身は、1986 年時点から現在まで FE よりも FSP に強くコミットしているが、FSP にも説明が与えられるべき点があると指摘している。さきの FE の問題とも重なるが、伝統的経験主義のもとでは、科学の探究を行う観察者の社会的アイデンティティが科学にポジティブな影響をもたらすことが説明できない点と、個々の女性やフェミニストの社会的経験 (階級, 民族, 文化) が様々に異なるにも関わらず、唯一のフェミニストの「スタンドポイント」が存在しうるのかという疑問が挙げられている。

フェミニスト科学哲学の出発点においてすでにハーディングが指摘していたこれら問題の捉え直しと解消を軸に、1990 年代から 2000 年代にかけて FE と FSP は変化していく。次の 3, 4 節で、それぞれの展開をみていく。

### 3. フェミニスト経験主義 (FE)

現在では、FE 内部にも多様な異なる立場が含まれており、FE 一般の特徴づけはかなり難しい。しかし、おおむねすべての立場に一致しているのは以下の点である。

- 経験主義：科学的理論・仮説・モデル等の正当化のさいの必須条件としてそれらの経験的成功 (経験的証拠, 信頼可能な経験的予測力, 説明力,

実り多さなど。これらは認知的価値 *epistemic values* ともいわれる) を位置付ける。

- ・ 価値自由理念の拒否：科学的探究のあらゆる側面(仮説形成, リサーチ・プログラムの選択, データ収集とデータ解釈, 経験的証拠による理論仮説テストなど)が, 認知的諸価値のみならず社会的・政治的バイアスや価値観等の非認知的諸価値から影響を受けることを認める。

ハーディングの初期設定と大きく異なるのが2点目である。哲学的転回以降のFE論者は, 1990年前後にはすでに, 初期FEの想定から離れ, 伝統的な価値自由理念を捨てていた。とはいえ, ハーディングがすでに指摘していた「非整合」は価値自由理念を捨てただけでは解消されず, アントニーが言うところの「バイアス・パラドックス」として抽出しなおされる。科学が諸価値の影響を不可避に受けることを認めるとしたら, フェミニズム的な価値観を擁護する一方で, 同様に価値観のひとつである男性主義的価値観の影響を悪しきものとして排除すべきだとなぜいえるのか (Antony [1994 (2003)]). 転回以降のFEにとっての共通課題は, このパラドックスを解消できる経験主義的方法を提起すること, より具体的には, 従来とは異なるタイプの, つまり価値負荷性と両立するタイプの科学の客観性を擁護できる経験主義的方法を提起することである。現在のFE内部の多様性は, パラドックスの解消のためのアプローチの多様性による。

アントニー自身は, ゴールドマンの信頼性主義の手法に基づく諸価値・バイアスの自然主義的・道具主義的評価を提案している。科学的推論や証拠評価に影響するバイアスが, 当該探究理論の真理の到達という目的に貢献する場合には「良い」バイアス, 真理到達を妨げる場合には「悪い」バイアスである。仮に, 女性差別的バイアスが不正確な結論を導きやすい場合には「悪い」バイアスであるとされる。科学者が使用してよいのは, 「良い」と判明したバイアスのみであり, 「悪い」バイアスは排除されなくてはならないというのがアント

ニーによるパラドクスの解消法である (Antony [1994 (2003)] 137)。

アントニーの提案はわかりやすいものではあるが、バイアスの真理貢献度を判断するには、バイアスの内容や影響が明示化されている必要があるという点で現実味に欠ける。多くのバイアスは、認識主体に明示的に支持されているわけではなく、認識主体の信念に潜在的に含まれているものでもあるようにも思えるからだ。

### 3-1. 価値の社会的マネジメント型 FE

多くの場合バイアスや価値観は必ずしも明示的に支持されているわけではない。この点をふまえたうえで、パラドクスに対しての洗練された解決を示しているのが、ロンジーノによって提起された「批判的文脈的経験主義」である (Longino [1990], Longino [2002])。これは価値の社会的マネジメント型の FE ともいわれる。

ロンジーノによれば、個々の科学者が、科学理論仮説の評価やデータ解釈をするさいの推論には、そのときの直接の評価対象であるデータや理論だけではなく、他の多くの背景的信念（これを「背景仮定」と言っておく）がかかわる。背景仮定には、仮説評価にかかわる基準としての認知的諸価値についての信念のほか、当該仮説と直接関係しない理論的信念、実験機器等の補助仮説、そして、本人の自覚の有無によらず、社会的情勢や政治的信念、認知的ゆがみや一般的先入見なども含まれる。科学的探究における推論には、非認知的な多様な諸価値や偏見（これを社会的諸価値と呼んでおく）が不可避に混入している。

かつての経験主義の伝統的な方法（初期 FE が支持していたものでもある）は、諸価値を適切にコントロールないしマネジメントする機能をもたなかったことから、科学に混入する社会的諸価値を不可視のものとして無視しながら、社会的諸価値の悪影響を排除できない状態を許容してしまっていた。たとえば、女性を医学研究から排除してきたことで男女の心臓病の症例の違いが見落とさ

れてきたことや、1970年代のロット・フレームテストが女性の視覚空間認識能力の低さを示すものと解釈されたことなどである。男性過剰な科学者共同体は、暗室でテストをうける女性被験者の心地悪さや、控えめなほうがよいとかいう女性が負わされている社会的イメージが、女性のパフォーマンスを隠す可能性があることに気づかず、実験結果を女性の視覚空間認識能力の低さを示すものと解釈していた。ここには、明示的か否かを問わず、女性は社会の中で非中心的な存在であるとか、男女には能力の相違や差があるといった研究者の価値観が混入していた可能性もある。

だが、ロンジーノは、科学的推論への社会的諸価値の混入じたいは問題視しない。以下のような方法で適切に社会的諸価値をマネジメントすれば、個々の科学者の信念に混入している社会的諸価値観の悪影響は最小化できるとする。また、そのマネジメントのさいに個々人が社会的諸価値を所持していることは、「探求にとってたんにネガティブなだけでなく、背景仮定の批判主義の基板上でポジティブな役割も果たす」(Longino [2002] 51)とする。ただし、社会的諸価値がポジティブに働くか否かは、科学者共同体の編成が以下の4つのノルム (Longino [1990] 76) をどの程度みたしているかに依存する。

1. 共同体内部に仮説の証拠の解釈、研究の方法、推論にたいしての相互批判の場があること。
2. 共同体内部で批判や証拠評価に対してある程度共有された基準があること。
3. 共同体の成員が、提起された批判にたいして応答すること。
4. 共同体内部の成員間での知的権威の平等性が調整され確保されていること。

上記のようなノルムを完全ではないにしても、ある程度みたした共同体においては、個々人レベルでの仮説評価は、多様な社会的諸価値をもつ個々人の集団で

ある共同体のなかで相互批判にさらされることで外部化され、当該評価が負っている価値や偏見が明示化される。共同体内部の批判が目指すのは、より妥当な仮説の受容であるが、この批判プロセスは、個々人レベルでの科学的推論に混入した社会的諸価値の感知とその除去にも役立つ。ひとは自身と異なる価値観や偏見が影響した仮説評価にたいしては、その偏向に気づきやすい。だから、ある社会的諸価値を持つことは、他の別の社会的諸価値の存在への感知を高めるといふ点で批判プロセスにおいてポジティブに働くといえる。たとえば、さきのロット・フレームテストの場合、かりに、フェミニストや女性研究者が共同体に含まれていれば、実験デザインの問題（女性にとって心地悪いテスト方法になっているとか）やデータ解釈の偏向に気づき、別の仮説、たとえば、パフォーマンスの性差は認識能力の差ではなく男女の社会化の差ではないか、とかいったものを指摘できたかもしれない。

だが、相互批判プロセスにおいて目指されているのは、諸価値の完全な排除でない。それが明示化され共同体内の批判に耐えている（つまり、相互批判を経てその社会的諸価値が科学的知識を歪めるタイプのものであることが指摘されない）限りでは、なんらかの社会的諸価値が経験的探究に影響を与えていることは容認される。ロンジーノは、「社会的価値が不在なのではなく、価値の社会的なマネジメント（social value management）」がなされていることが科学の客観性が維持された状態である」とする（Longino [2002] 50）。共同体が上記の4つのノルムをよりよくみたしているほど、相互批判による社会的諸価値のマネジメントはうまく機能する。だから、その共同体から産出される科学的知識の客観性は共同体のノルムの遵守の程度によって変化することになる。

共同体の相互批判により、社会的諸価値の影響を可視化し、それら社会的諸価値が科学的知識に与える影響を吟味することで、排除すべきバイアス・価値観と、含まれていてよいバイアス・価値観とを区別すべきであるというのがロンジーノのパラドクス解決策である。

ロンジーノの立場は、FE内部の代表的理論のひとつとなっているが、同時

に多くの批判にさらされてもいる。とくに FSP から多く批判されるのは、価値の社会マネジメント型 FE が、様々な社会的諸価値を平等に扱う点である。どの価値もそれとは別の社会的諸価値への検知力を持つという機能を持つ点で平等であり、価値の内容による優劣は問われない。だから価値マネジメント型はフェミニズムのコミットメントを他よりも積極的に正当化しない。ロンジーノの議論において、たとえば、女性蔑視とか女性の無視といった価値観が、仮説形成に悪影響や歪みを及ぼしていると評価された場合には、その歪みをもたらす女性蔑視的バイアスは除去される。また、フェミニスト的な価値観をもつひとは、女性蔑視的な価値観の悪影響を感知しやすいかもしれない。だが、このとき、フェミニスト的価値観は、歪み感知に役立つという点では役立つが、女性蔑視的価値観よりも本質的に良いものであると評価されているわけではない。

同様のことだが、諸価値の平等主義は、いかなる価値観にたいしても探究への参与を認めうる。たとえば、直観的には明らかに誤っているように思える疑似科学的価値観とか、人種差別的な価値観も、相互批判の後にはそれらによる悪影響が除去されるにしても、探究の出発点においては、他の諸価値観と「異なる」視点をもたらし共同体の批判を活性化する点で役立つものとみなされうる。この点については、現在まで多くの批判的指摘がなされている (e. g. Kourany [2010], Hicks [2011])。ロンジーノ自身は目立った反論はしていないが、近年ではロリンが、ロンジーノの立場を擁護する議論を多く展開している (e. g. Rolin [2011], Rolin [2017])。

### 3-2. ホーリズム型 FE

FE 内部で影響力を持つ他の路線としては、クワインの自然化された認識論およびホーリズムの影響を強くうけたネルソンやキャンベル、アンダーソンらが提起しているホーリズム型 FE がある。ネルソンは、クワインの言葉をかりつつ、倫理的・政治的諸価値も、理論的主張とともに「経験感覚の裁きに直面

する」としている (Nelson [1990])。この立場は、ある特定の科学的理論の経験的成功を、そこに負荷ないし混在している社会的諸価値の経験的成功ともみなす。

この型はフェミニストの価値観や観点に基づいて形成された仮説やデータ解釈が、経験的によりよい理論をもたらした事例を、フェミニスト的価値観の成功として積極的に評価することができる。この型にもとづいて多くの経験的事例が分析されているが、典型的な事例としてよく言及されるのが、A・スチュワートらの離婚の心理的影響についての心理学的理論である。従来の離婚研究が、離婚を女性個人の損失的イベントとみなし、女性間の個人差を無視する傾向があったのにならして、スチュワートらは離婚による損失と獲得の両面を想定し、また女性の家族関係や収入などの差異に注目し、離婚を家族のあり方の変化イベントとみなした。その結果、従来理論よりもより包括的なデータにならしてより整合的な説明が可能である、つまり、経験的により成功した理論を確立した。ホーリズム型 FE の代表的論者であるアンダーソンは、この成功は、従来研究がコミットしていた男女差別的価値ではなく、スチュワートらがコミットしていたフェミニスト的価値が経験的により強く支持されたこととして解釈できるとしている (Anderson [2004 (2012)])。

つまり、ホーリズム型は、諸価値の優劣を、その諸価値が含まれた経験的仮説の優劣として評価することで、アントニーのパラドクスに対処していることになる。ただし、アンダーソン自身も指摘するように、特定の諸価値に導かれた仮説が経験的に成功するか否かは偶然的かつ個別的な問題である。また、どのような価値がどのような領域の経験的仮説に寄与するのかが領域相対的である。フェミニズム的価値観は、離婚にかんする心理学研究には寄与するかもしれないが、そのことはフェミニストの価値観が物理学や化学においても寄与することは含意しない。アンダーソンの解釈では、それを積極的に含むことが、ある領域においてはより大きな経験的成功をもたらすといういみで、フェミニスト的価値観にプラグマティックなよさを認めていることになる。

しかし、ホーリズム型 FE 論者のなかには、よりラディカルな立場を採るものもある。クロウやキャンベルは、諸価値の真偽が経験的にテスト可能であるという道徳的实在論とホーリズムを併用している (e. g. Cambell [2003], Clough [2012])。この場合には、フェミニスト的価値に導かれた経験的仮説の成功は、フェミニスト的価値の真理を確証すると解される。クロウは、フェミニスト的価値観は経験的に真であるがゆえに正しい科学的探究に貢献し、人種差別的価値観は偽であるがゆえに誤った科学を導くと主張している (Clough [2015], Clough and Loges [2008])。しかし、プラグマティックなホーリズム型 FE が比較的多くの成功事例を提供できることで支持を得るいっぽうで、ラディカルなホーリズム型 FE にたいしては科学史事例にたいしての説明力の不足および価値評価モデルとしての説得力の不足が指摘されている (Solomon [2012])。

#### 4. フェミニストスタンドポイント (FSP)

従来の経験主義的方法は、科学的探究に含まれる女性蔑視や無視といった社会諸価値観をうまくコントロールできなかった。FE は、この問題にたいして、新たな経験主義的方法および客観性概念を構築することでこたえてきた。だから、FE はどの型でも、科学的仮説それじたいの評価や正当化のための理論として提起されている。

これに対して、FSP はなんらかの現象について科学研究をするさいの方法論的主張とか手法としての性格が強い。そのいみで、FSP は、FE とは別のタイプの科学的理論の評価・正当化理論というわけではなく、FE と両立可能な手法であるとされることもある (e. g. Solomon [2009], Solomon [2012])。ただし、さきにみたように FE にも様々な型があり、そのすべてと両立可能なわけではない。また、FSP も、1970-80 年代のスミス、ハートソックらによる社会科学へのスタンドポイント概念の導入以来、変化しつつづけており、FSP 一般の統一的主張を見出すことは難しくなっている。

近年までの FSP の議論を集約すると、少なくとも以下の 2 つないし 3 つが

FSP の中心的テーゼといえる。

- ①状況づけられた知識 (situated knowledge) テーゼ：我々が社会のなかで置かれた位置は、我々の経験に影響を及ぼし、我々が何を知識として形成するかを限界づける。あらゆる知識は、なんらかの社会的に状況づけられた観点 (= スタンドポイント) から形成される。
- ②認知的特権性 (epistemic advantage) テーゼ：なんらかのスタンドポイントは、その観点がより偏向が少なくより完全であるという点において、あるいはよりよい知識を提供しうる点において、認知的に特権的である。
- ③反転 (inversion) テーゼ：社会的により恵まれない側、被支配者の側にある人びとの観点は、支配側の人びとの観点よりも、認知的に特権的である。

ハーディングの初期設定によれば、FSP とは、女性の観点 (パースペクティブ) を男性の観点よりもより偏りのない完全なもののみなし、女性の観点を社会や自然理解、つまり経験的知識形成のより望ましい基盤 (= スタンドポイント) にするという主張であった。うへのテーゼは、これらを腑分けしたものともいえる。

このあとそれぞれのテーゼの内実と展開を整理していくことにするが、FE との関係をお先におさえておくと、①②については部分的に FE と重なる部分はあるが、③は FSP 独自のテーゼといえる。

#### 4-1. 状況づけられた知識

社会的な位置 (social location) がスタンドポイントを形成し、スタンドポイントが知識を形成する、というテーゼである。物質的な生活条件の違い (地域、気候、衛生水準なども含む) や、社会的構造内部での位置の違い (支配層か非

支配層か、階級のどの位置か、職業、役割、所属グループなど)は、人びとに異なる経験をもたらす。社会的位置の相違は、何を経験的証拠として理解するか、あるいは、経験的証拠として何にアクセスしやすいかの相違を生む。(ここで、確認しておくが、知識のリソースを経験に求めること、経験的エビデンスを重視することにおいてFSPもまた経験主義である。)したがって、何を知識とするかは社会的位置に限界づけられている(Intemann [2010] 784)。

しかし、すでにハーディングも示唆していたように、ある特定の社会的位置に一意に対応するようなユニークな観点など存在しうるのだろうか。1970-80年代のFSPないし差異のフェミニズムは、女性であるという社会的位置ないし女性としてのアイデンティティは、「女性の知り方(women's way of knowing)」を形成することを強調しがちであった。それゆえ初期のFSPは、社会的位置の本質主義と、スタンドポイントの自動的形成を支持するものと解釈されがちであった。しかし、ワイリーやインテマンはこれを否定している。

ワイリーによれば、「FSPは社会的位置や社会的カテゴリーにかんする本質主義的な定義を前提してはいけない」(Wylie [2003] 28)。社会的位置は、なんらかの本質を内包する集団として理解されるべきではない。そして、ある社会的位置にあることが、自動的に認知的に特権的なスタンドポイントを形成するわけではない。スタンドポイントは、我々の社会的位置についての反省と、社会的位置が知識形成状況にもたらす相違の批判的意識を通じて「獲得される」ものである(Intemann [2010] 785)。

したがって、FSPは、差異のフェミニズムへの批判のひとつでもあった、ある集団の普遍的同一性、同質性を前提しているわけではない。インテマンは、同じ女性でも、様々な民族、職業、階級、地理的位置などの相違があるように、あるひとつの社会的グループ内の構成員は、それぞれまた別の社会的グループの構成員でもあるから、あるひとつのグループの構成員が実質的にまったく同じ経験をすることはないとしている。

#### 4-2. 認知的特権性テーゼ

スタンドポイントが本質主義的な社会的カテゴリーを前提しないもの、獲得性のものであるという点は、ロリンがFSPのバイアス・パラドクスと呼んだものへの部分的な回答にもなりうる。ロリンは、アントニーが指摘したFEにとってのパラドクスと同種のものがFSPにも当てはまるとしている。すなわち、FSPは状況づけられた知識テーゼにより、知識がすべてローカルであること、つまり、それを産出する人々のなんらかの社会的位置ないしスタンドポイントに相対的であるということをも認める。しかし、そうであれば、ある社会的位置から形成されたスタンドポイントやローカルな知識を、別のスタンドポイントやローカルな知識よりもなぜ優先することができるのか（Rolin [2006]）。状況づけられた知識テーゼは、スタンドポイントないしローカル知の相対主義を導き、認知的特権性の主張と両立しないのではないかという指摘である。

インテマンは、複数の社会的位置のうちで、どの社会的位置が認知的に特権的なスタンドポイントをもたらすかは、社会的位置のあいだでの権力関係、追求されている問題、背景的な社会・政治的事情等に相対的であると述べる。たとえば、フェミニストの指摘によって心臓病の男女差が気づかれるようになったという事例でいえば、女性がこれまで心臓病研究において無視されてきたという意識とかそれによって被る被害（症例が理解されない）経験が、女性ないしフェミニストのスタンドポイントを、これまでの見解の欠陥を指摘しより偏りのない知識をもたらすといういみで、認知的に特権的なものとして括りだしたものと解釈できる。

あるいは、次の反転テーゼとも関係するが、FSPのベストプラクティスとしてよく言及されるのがパトリア・ヒル・コリンズの「インサイダー・アウトサイダー」の議論である（Colins [1991]）。彼女は、アメリカでHIVワクチン開発研究をするアフリカ出身の生物学者という立場が、認知的に特権的なスタンドポイントを形成する例をあげる。彼女は、生物学者としての専門知を習得した科学者としては科学者共同体「インサイダー」であるが、アフリカ出身で

ある、つまり、アメリカにおけるワクチン研究の歴史や実践からは見落とされがちであったグループのメンバーである点では「アウトサイダー」である。このような二重の位置は、彼女に、アメリカの生物医学研究において広く受け入れられている仮定の問題点を気づかせるスタンドポイントを形成する。たとえば、アメリカとアフリカの環境の相違のゆえに、アメリカでの臨床試験で得られたエビデンスは、アフリカの患者たちにそのまま適用できないかもしれないとか、アメリカで開発されたワクチンは高い冷凍技術を必要とし、アフリカの環境下では実践的使用に耐えないとか、アフリカにおける女性に対しての文化的バイアスや経済的障壁のゆえに、アフリカにおけるワクチン効果はアメリカの研究者による予測よりも下回るかもしれないとか、そういったことである。インサイダー・アウトサイダーとしてのスタンドポイントは、従来のワクチン研究の欠陥を指摘し、より広い範囲の経験的エビデンスの必要性や、新たなモデルや技術の開発に役立つという点で、認知的に特権的である。また、このスタンドポイントは、彼女がふたつの立場から得られる経験を統合する過程で獲得されたものともいえる。

とはいえ、むしろ、インサイダー・アウトサイダーのスタンドポイントが「特権的」なものとして機能するかのいかには、どのような領域でのどのようなプロジェクトに参加しているのかに相対的である。プラグマティックなホーリズム型FEも認めていたように、どんな経験や観点が、より包括的な経験的仮説を生み出すことに寄与するかは、領域やトピックに相対的かつ偶然的な問題である。また、インテマンは、インサイダー・アウトサイダーのスタンドポイントが、有益な批判をもたらすものとして機能するためには、ロンジーノが指摘していたような科学者共同体の知的平等性や批判への応答可能性が確保されている必要があるとしている (Intemann [2010] 789)。

したがって、ここまでのFSPの主張で、ロリンが指摘したパラドクスに対しての解決の回路は確保されているといえる。また、FSPは、科学的知識探究に社会的位置という要素が役割をもつことを求めるが、より偏りのないより経

験的に強く支持されているという意味での客観的知識を求める経験主義的な立場であることも示された。これは、あるスタンドポイントをより広い経験的エビデンスの可能性をもたらすゆえに特権化するという点にもあらわれている。

#### 4-3. 反転テーゼ

状況づけられた知識テーゼは、知識形成にさいしての社会的位置の影響を主張する。この点は、人々が置かれた社会的位置は、人びとが所持する社会的諸価値にも影響するだろうから、このテーゼの主張は（FE は社会的位置という語は使用しないものの）FE にも部分的に共有されている。ハーディングは、社会的アイデンティティを経験主義内部で扱うことの難しさに言及していたが、FE によって提起された諸価値のコントロールや評価手法は、スタンドポイントの評価にも流用可能な部分は大きい。また、ある特定のスタンドポイントや社会的諸価値に、領域トピック相対的に認知的特権性を認める点では、FE（ホーリズム型 FE）と FSP は共通している。しかし、社会的により恵まれない、支配される側の観点が、認知的に特権性をもつという反転テーゼは FSP に特徴的なものである。だが、このテーゼをどのように解釈するかは難しく、また、どのように（あるいはそもそも）擁護可能であるのかも議論がわかれているところである。

タネシニは、反転テーゼについて以下のような解釈をあたえている。被支配層の人びと、つまり、彼らの状況への理解や彼らの生活の改善を妨げられている人びとによる知識主張は、支配層の特権化された人びとによる知識主張よりも、認知的に優れている。なぜなら、それらは世界についてのより真なる主張であるか、あるいは、世界についてのより偏向のない深い理解を提供しうるからだ。

現行の社会において支配層にある人びとは、被支配層の人びとのニーズや経験を知らうとはしない。それらの理解は支配層の人びとが得ている既存の利益やステイタスを危うくする可能性があるからだ。だから、支配層の人びとは、

自己利益の維持のために、自分たち以外の人びとの観点を無視する偏った観点を敢えて採用している。だが、支配される側の人びとは、支配層の人びとの利害関心によって歪んだ社会的世界にかんしての主張のあり方を理解しつつ、それらの支配層の主張には欠如した観点を指摘し、自身のニーズや経験に基づいた知識を主張することができる。これは、被支配層の人びとの観点が、より広く偏りが無い世界の見方を提供するといういみで認知的によりよいスタンドポイントを形成しようということである (Tanesini [2020] 337)。

タネシニの議論には一定の説得力はあるが、この説明で、反転テーゼが正当化可能か、つまり、被支配層の人びとのスタンドポイントが常に「認知的な」特権性をもつということが正当化可能かは疑問である。支配される側のスタンドポイントや利害関心への優先的な注目は、社会のより多くの人びとのニーズを救い社会をより公正に変化させる機会を大きくするかもしれない、そのいみでプラグマティックに、あるいは政治的・倫理的には正当化可能かもしれない。だが、先の認知的特権性テーゼの場合と同様に、どんな観点やスタンドポイントが、経験的によりよい理論や知識を生むかは、領域相対的かつ偶然的であろう。タネシニ自身、恵まれない人びとの利害関心やニーズを救うような理論やアプローチが、経験のないいみでより有意義であるかどうかは、開かれた問題であるとも述べている (Tanesini [2020] 337)。

反転テーゼをどのくらい強くとるかはFSPの内部でも論者によって異なるように見える。ハーディングは「強い客観性」概念とともに、抑圧された生についての理解をもたらす観点は、それらを無視した社会的世界理解よりもより真理である、として強く支持している (Harding [1991])。ワイリーやインテマンは従属的な立場が認知的利点をもたらしうることを否定はしないが、あくまでも領域トピック相対的に認められるものとして、反転テーゼの主張を認知的特権性テーゼの可能性の一部として捉えるスタンスを採っているようである。

## 5. 近年の展開と他領域との協働可能性

リベラルフェミニズムと差異のフェミニズム時代に比べると、現在のFEとFSPとは非常に洗練した立場に発展してきた。両者とも批判や問題点がないわけではないが、かつてシーピンガーが危惧したような、いわゆる“フェミニズム科学”の同定と正当化に陥ることなく、科学的探究内部の社会的諸価値を適切に扱おうとする分析枠組みを供給することには成功しているといえよう。

さいごにFEとFSPの接近にかんする近年の指摘と、認識論・科学哲学内部の他の領域やアプローチとの関連についてすこし述べておく。

まず、一点目。FEとFSPとは、ここまで見たようにそれぞれの内部に多様なアプローチを含むものに洗練化されてきた。しかし、その洗練化とともに両者の相違は非常に小さくなっているとの指摘もある。インテマンは、FSPにコミットする論者であるが、ロンジーノのFEを対象としたうえで、FEとFSPの統合を提案している。インテマンは、FEはFSPの主張を機能させるための経験主義的枠組みを提供する点で非常に有益であるが、特定の諸価値を特権化できない点で問題があるとする。彼女は、ロンジーノのFEに認知的特権性を併用させた「フェミニストスタンドポイント経験主義」を提案している(Intemann [2010] 794, Intemann [2017])。しかし、FE内部にはプラグマティックなホーリズム型FEのように認知的特権性を認める立場もあるし、インテマン自身は強く解釈しないにせよFSPの反転テーゼは、ロンジーノの立場とは相いれないようにもみえる。反転テーゼは、FEとFSPの諸価値観やスタンドポイントの多様にたいする見解の相違の出所といえる。FEは社会的諸価値が少なくとも互いに他と異なることを重視するが、FSPの反転テーゼはどのような形態で異なるか(支配/被支配, 中心的/周縁的という関係)を重視する。FEとFSPとのあいだの多様性理解の相違については、ハーディングの「強い客観性」概念の明確化も含めて他で改めて検討したい。

二点目。FE、FSPを含むフェミニスト科学哲学の議論は、社会的諸価値や

社会的位置といった要素が、科学的探究の内部で適切な役割をもつことを示すことで、価値負荷のかつ客観的な科学像の提供に寄与してきた。近年ではひろく科学哲学上で、科学的探究上での社会的諸価値の役割は認められつつあり、諸価値の混在を前提したうえで、重視すべき諸価値を誰がどのように決定するのかという論点が深められつつある。ロリンは、これを「価値の適切な役割の問題」から「適切な価値の問題」への流れとしておさえている (Rolin [2020])。適切な価値の問題の路線には、キッチャーによる民主主義的科学ないし秩序ある科学モデルや、公衆の科学理解にかんするジャサノフの議論がある。これら路線と、FEやFSPのモチベーションとは重なり合う部分が大きく、協働することで科学における諸価値についてのより広くより詳細な理解が可能であろう。この協働の萌芽としては、エイジの試みなどがある (Eigi [2017])。

さらに、最近の認識論、社会的認識論の成果との連携もみられる。FEにコミットする論者であるロリンは、彼女自身が指摘したFSPのバイアス・パラドクスと、ロンジーノ型FEに指摘される諸価値の平等主義ないし相対主義の問題の両者を、マイケル・ウィリアムズの認識論的文脈主義、とくにデフォルト・エンタイトルメント概念を用いて救おうとしている (Rolin [2006])。詳細は改めて検討する必要があるが、ロリンの試みは、認知的特権性がどのようなときに認められどのように正当化されるのかについて、従来のFEやFSPよりもより分析的に説明可能な枠組みを提供するもののようにも思える。また、徳認識論の枠組みを用いて、認知的特権性の説明を試みる論者もおり興味深い (Daukas [2011])。あるいは、タネシニは、FSPとくに反転テーゼの理解ないし正当化には、フリッカー (Flicker) やメディナ (Medina) らによる最近の証言の認識論や無知の認識論 (epistemology of ignorance)、あるいは認知的不正義 (epistemic injustice) の知見が役立つだろうと示唆している。認知的不正義の知見は、ロンジーノが科学者共同体にたいして提起していたノルムの理解や正当化にも貢献する可能性がある。1980年代以降のFE、FSPの展開の背景には、クーンやクワインといった新科学哲学の成果も大きく影響しているが、今

後はこういった新しい社会認識論的知見もフェミニスト科学哲学に有益な視点を提供してくれそうである。

\* 本稿は JSPS 科研費 19K13047 (課題名「知識形成における多様性と客観性の認識論的基盤の研究」) の助成を受けた研究成果の一部です。

## 文 献

- ・ Anderson, E. [2004 (2012)], “Uses of Value Judgments in Science: A General Argument, with Lessons from a Case Study of Feminist Research on Divorce”, *Hypatia*, 19(1), 1-24. Reprinted in Crasnow, S. and Superson, A. (eds.) [2012], *Out from the Shadows Analytical Feminist Contributions to Traditional Philosophy*, Oxford University Press, 377-404.
- ・ Antony, L. M. [1994 (2003)], “Quine as Feminist: The Radical Import of Naturalized Epistemology”, Reprinted in Nelson, L. H. and Nelson, J. [2003], *Feminist Interpretations of W. V. Quine*, Pennsylvania state University Press. 95-149.
- ・ Cambell, R. [2003], “Feminist Epistemology Naturalized”, in Nelson, L. H. and Nelson, J. [2003], 335-364.
- ・ Clough, S. [2012], “The Analytic Tradition, Radical (Feminist) Interpretation, and the Hygiene Hypothesis”, in Crasnow, S. and Superson, A. (eds.) [2012], 405-434.
- ・ Clough, S. [2015], “Fact/Value Holism, Feminist Philosophy, and Nazi Cancer Research”, *Feminist Philosophy Quarterly* 1, (1). Article 7. doi : 10.5206/fpq/2015.1.7.
- ・ Clough, S. and Loges, W. E. [2008], “Racist value judgments as objectively false beliefs: A philosophical and social-psychological analysis”, *Journal of Social Philosophy*, 39(1), 77-95.
- ・ Colins, P. H. [1991], *Black Feminist Thought: Knowledge, Consciousness, and the Politics of Empowerment*, Routledge
- ・ Daukas, N. [2011], “Altogether Now: A Virtue-Theoretic Approach to Pluralism in Feminist Epistemology”, in H. E. Grasswick (ed.), *Feminist Epistemology and Philosophy of Science: Power in Knowledge*, Springer, 45-67.
- ・ Eigi, J. [2017], “Different motivations, similar proposals: objectivity in scientific community and democratic science policy”, *Synthese*, 194, 4657-4669.
- ・ Harding, S. [1986], *The Science Question in Feminism*, Cornell University Press.
- ・ Harding, S. [1991], *Whose Science? Whose Knowledge? Thinking from Women's Lives*, Cornell University Press.
- ・ Intemann, K. [2010], “25 Years of Feminist Empiricism and Standpoint Theory: Where Are We Now?”, *Hypatia*, 25(4), 778-796.

- ・ Intemann, K. [2017], “Feminism, Values, and the Bias Pradox”, in Elliott, K. C. & Steel, D. (eds.) [2017], *Current Controversies in Values and Science*, Routledge, 130-144.
- ・ Kourany, J. A. [2010], *Philosophy of Science after Feminism*, Oxford University Press.
- ・ Longino, H. E. [1990], *Science as Social Knowledge*, Princeton University Press.
- ・ Longino, H. E. [2002], *The Fate of Knowledge*, Princeton University Press.
- ・ Nelson, L. H. [1990 (2003)], “Who Knows : From Quine to Feminist Empiricism”, Reprinted in Nelson, L. H. and Nelson, J. [2003], 59-94.
- ・ Rolin, K. [2020], “Objectivity, trust and social responsibility”, *Synthese*, online. 28, Aprl. 2020.
- ・ Rolin, K. [2006], “The Bias Paradox in Feminist Standpoint Epistemology”, *Episteme*, 3(1-2), 125-136.
- ・ Rolon, K. [2017], “Can social diversity be best incorporated into science by adopting the social value management ideal ?”, in Elliott, K. C. & Steel, D. (eds.) [2017], 113-129.
- ・ Shiebinger [1999], *Has Feminism Changed Science ?*, Harvard University Press. (シーベンガー『ジェンダーは科学を変える?!』小川他訳, 工作舎, 2002)
- ・ Solomon, M. [2009], “Standpoint and Creativity”, *Hypatia*, 24(4), 226-237.
- ・ Solomon, M. [2012], “The Web of Valief: An Assessment of Feminist Radical Empiricism”, in Crasnow, S. and Superson, A. (eds.) [2012], 435-450.
- ・ Tanesini, A. [2019], “Standpoint Then and Now”, in Flicker, Graham, Henderson, Pedersen (eds.) [2019], *The Routledge Handbook of Social Epistemology*, 335-343.
- ・ Wylie, A. [2003], “Why Standpoint Matters”, in Figueroa, R. and Harding, S. (eds.), *Science and Other Cultures : Issues in Philosophy of Science and Technology*, Routledge, 26-48.
- ・ 二瓶真理子 [2020], 「フェミニスト経験主義における事実・価値ホーリズムの批判的検討」, 『東北哲学会年報』, 第36号, 15-28.

## 注

- 1) 二瓶 (2020) はフェミニスト経験主義における特定の立場 (ラディカルなホーリズム型 FE) の批判的検討を目指したものであり, 本稿はフェミニスト経験主義およびスタンドポイントの概説を目的としたものであるが, 本稿の以下の記述, とくにフェミニスト経験主義についての説明と整理には, 内容としては二瓶 (2020) と重なる部分もある。ただし, 二瓶 2020 では, 本稿で取り上げなかった FE 内部の他の立場ジャネット・コラニーのアプローチにも触れている。